
最強です！魔王様！！

ゴマ増

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強です！魔王様！！

【Nコード】

N1251Z

【作者名】

ゴマ増

【あらすじ】

山に入りこんだ普通？の村人。数年たつて出てきたら・・・

「え？俺が魔王？」

さて何がどうしてこうなったツツツ！！???

残念な勘違いで成り立ってしまった最強な魔王様の生活です！

「古代最強魔法？え？初級じゃないの？」

始まり！魔王様！（前書き）

ノリではじめてしまった・・・主人公最強系ですw

始まり！魔王様！

遙か昔、この世界には、人族、亜族、魔族、龍族、神族がいた。それらは、互いに争うことなく共存していた。

だがある日、一人の人族がいつものように山へ獲物を探しに入った時、見たことのない生き物がいた。

その人族は、触らぬ神にたたりなしと、無視して狩りを続けた。

そしてその人族は帰ってくることはなかった。

幾人もの人族がその人族を探して山へ入ったが、入ったものはいずれも途中で迷ってしまい、最後には山から下りていた。

時には亜族、魔族なんかも入って行ったが・・・やはり帰ってきませんでした。

すべての種族の長たちは、そんな山を危険に思い、立ち入り禁止にしました。

時は過ぎ、数年後。

魔王が現れた。あの立ち入り禁止になっていた山から。

魔王は神族でさえも太刀打ちができぬような力を持って現れた。

・・・大量の魔物と共に。

魔物は瞬く間に世界を埋め尽くした。

そして、すべての種族は・・・敗北した。

~~~~~

「っっていう夢を見たんだ。」

「何言ってるんだお前」

やあどうもみなさん。魔王です。

魔王やってみました。ていうか現在進行形でやっています。

上のは妄想じゃないよ!!現実だよ!!っていうか回想だよ!

過去の出来事を振り返ってたんだよ!!

自慢じゃないよおおおおお!!

つと失礼。取り乱してしまったようだ(笑)。テンション高くてごめんねええええ!!!!

冗談はそろそろ終わりにしないよおおおおお(笑)!!!

「おい、聞いてんのか?」

「ウンキイテルキイテル」

「嘘つけこら」

「わかった俺は女です」

「.....」

「ああわかったわかったから無言で首に剣突き立てるな」

こいつは.....紹介はめんどいから後でいいや。

とりあえず、今の状況を説明しようか。

あの夢が現実にあつたことなんだが.....実はちょっと違うんだ。

あ、ちなみに最初に入ってた人族、俺。

いやあ.....あの山に入ってからさあ.....いつも以上に獲物が取れて喜んでたらさあ.....あの謎の生き物が襲ってきてさ?

倒したのよ。一応。でもさあ、倒したところになんか空間の?裂け目?的なものが現れてさ.....。魔物大発生。

俺、あわてて下山、しようとしたらなぜか元の狩りをして場所に戻される。みたいな感じで出られなくてさ？

それから数年間、そこで頑張ってたらなんかさ？俺気づかない間にめっちゃ強くなってたらしいんだよね。

なんか街では魔物にランクが付いてるらしくてさ？したからF〜SS+まであるわけよ。

でその中のA〜Sランクに入るグリフォンとかガーゴイルとか相手に無双してたらさぁ……。

知らぬ間に俺最強！みたいなことに。  
ちなみにこの世界、LVの概念が魔物の発生と共に出来てさ？俺、今LV984763918693628969164916248961969になってる。

……うん。みなまで言うな。桁が大きすぎて読めんとか言うな。

ちなみに俺のLV知ってる人はほとんどいない。

それから、普通に暮らしてきた村人のLVは20歳で大体10〜15。高くても20行くかわからん。

冒険者なら20歳で大体30〜40。高くても50〜60くらい？勇者って呼ばれるようなやつらは100〜200。

英雄まで行くと500くらいかな？

魔物はF〜Eが1〜5。E〜Dが6〜10くらいで村人はこちら辺が限界だな。

C〜Aになると大体15〜50。ここらが冒険者の限界。そしてS〜SSS+が60〜100000くらい。……うん。普通はもう太刀打ちできんな。

ちなみにSSS+一体VSで釣り合いが取れるのは、バランスのとれたチーム編成の英雄×20人くらい？

ハメ技使って、一週間徹夜で戦い続ければ勝てるかなぁ……？くらしいのLVだぜ？

え？俺？んなもん凸ピンで消し飛ばよ？

おっと、話がだいぶ逸れたな。逸れ過ぎて振り返ってくるかもな。で、だ。ちよつとLⅤが変態染みちゃった時について山から出られたわけですよ。

「・・・つ・・・ついにいられたあああああああ  
つてね。」

そしたらさ、どうやらかなり声が大きかったみたいでさ。近くの街の門番がこっちに来て

「何者だ！」

つて、俺久しぶりに見れた人族に感動しちゃってさ・・・。

「や・・・つたあああああああああ!!!!!」

つて叫んだら・・・門番の人がびっくりして気絶しちゃってさ・・・。

しかもそのせいかは知らんが『バリント』つて音がして振り返ると・・・魔物らしき生物がうようよと・・・。

んであとは残った門番が「な、何をした!?て、敵襲!!!敵襲うううう!!!」

つて叫びながら帰って、しかもなんだかそこにいた魔物に懐かれて、完全に俺W A R U M O N O。  
な状況になって・・・そして成り行きで俺魔王。みたいな。

ついでに言うとも最初に懐いた魔物つて、別に俺に懐いてたわけではなく俺の持っていた干し肉がほしかつただけらしくてさ。

肉やったら帰った。

それに従えてたわけじゃねえし。勝手におそってただけだし。

んで俺住処なくなつたから、近くにあったボロボロの廃墟に住んだら、近くの村人に見られて魔王の城認定ww。

いやただの廃墟なんすけどww。

で、俺はそこで生活してただけなんだけど、なんか魔物がジャンジャン暴れてさあ・・・それが全部おれのせい。

んでついには勇者登場!完全に俺悪者。

・・・よし、おもしろそうだ。勇者が来たときの回想をしよう。

~~~~~勇者登場時の回想~~~~~

「ふあ〜・・・眠い・・・」

今日は起床時間が遅かった。しかも眠い・・・。めっちゃ眠い。

この廃墟に住み始めてから一年。俺の魔力でいろんなものを作った。ベッド。テーブル。椅子。魔物よけの结界（魔物以外は入れる）。

窓。扉（壊れてたのを直した）。

部屋も整えて、掃除もした。食べ物外から狩ってきた（または街で買ってきた）ものを自分で調理して食べた。

そんな生活を繰り返していたから情報収集なんかもしてない。・・・
・たまに街に出て遊んでくるが。

だから今日、勇者がここに来るなんて知らなかった。

俺はもう昼になっていたのでものごとく食糧を用意して料理を作っていた。

その時、

「魔王！！！！隠れてないで出てこい！！」

「ブツ！！！！」

・・・そんな声が聞こえてしまったのでつい噴き出してしまった。ここにはたまに討伐隊らしき軍隊が出てくるのでちょっとしたトラップを仕掛けている。

といっても一つだけ。それは、

「もう一週間も彷徨っているんだツツ!!頼むから出てきてくれ・
・!!!」

「……迷路だ。この廃墟にはちよつと特殊な空間を作っている。
魔力感知ができず、謎のつくりで感覚をずらし、相手を迷わせる。
自分でも一度試して……。一か月彷徨った……。
そしてここには食糧なんかはない。つまり、一週間も彷徨っていて
はきつと手持ちの食糧が尽きているだろう。」

「……言うかなんでここにいるんだよ……」

もう一度言おう。俺はここに勇者が来ることを知らない。なので・

「おい。だいじょーぶかー」

普通に出た。

「ツツツ!!!???貴様が魔王か!??」

「……なんかそう呼ばれてるらしいが」

「ならもうこんな悪事はやめるんだ!!!」

「……へ?」

何度でも言おう。俺はここに勇者が来ることを知らない。
ついでに言うと俺は何もしていない。

ちなみに、今俺の目の前にはなんかこう勇者だあー!みたいな格好
の男が一人、あからさまに魔法使いですみたいなやつが一人、同じ
く僧侶っぽい人、傭兵っぽい人が一人という典型的な勇者ご一行が
いた。

「そうです!!人を・・・なんの罪もない人たちを苦しめて何が楽しいんですか!?!」
僧侶っぽい人に言われた。・・・いやだから俺何もしてないんだけど。

「勇者!修道女!無駄だ!こんな奴と話すことなんかねえ!!この野郎!!!!」

傭兵っぽい人が斬りかかって来た。なのでとりあえず、

パシッ

「なッ!!!?!」

「うそ・・・!?!」

「くっ・・・!?!」

「そんな・・・!?!」

二本指で挟んでみた。

そしてそのまま横に軽く振り、投げる。

「グッ・・・」

「レイ(さん)!!!!!!!!」

あ、ちゃんと加減もしてるし投げる場所も考えたよ?危なくないよっ。

「おーい・・・とりあえずはなs」くそ!!!!よくもレイを!!!!!!」

・・・って聞いちゃいねえ・・・」

勇者っぽい人が斬りかかってきた。・・・だから俺何もしてない
つて。斬りかかってきたのそっちじゃん。
ん？なんか光ってる？

「喰らえ！！斬光閃！！！」

勇者がなんかかつこ恥ずかしい名前を叫びながら突っ込んできた。
・・・え？何がしたいの？

「はあああ！！」

ヒュパシッ

「「「え？」「」」

とりあえずそのまんま掴んでみた。

「み、見きられた！？俺の最速の攻撃が・・・こんなたやすく・・・
！！！！？」

「え？それで最速なの？」

あ、やべ。つい口に出しちゃった。

「く・・・っそ・・・はな・・・せ！！！！」

あ、掴んだままだった。

「いいよー」

パツ・・・

「へ？うわつと・・・」

「今よ！ライトニング！！！」

お、今度は魔法かい？
とりあえず・・・

スツ・・・

バチイ！！

「」「」「な、なに！？」「」「」

素手で防いでみた。

「そ、そんな・・・素手で」

「リア！！俺が時間を稼ぐ！！！！あれをやれえ！！！！」

「で、でも！！！！」

「いいから早く！！！！うおおおおおおお！！！！」

また勇者（めんどいから勇者でいいや）が突っ込んできた。

「爆陣龍撃！！！！」

なんかかつこいいなあ・・・その技。
なので喰らってみた。

「……え？それだけ？」

「威力低くね？」

「……そ、そんな……」「」「」

なんか勇者ご一行の顔が絶望に染まっていた。

「……いや……あのね？だから俺、何もしてないんだけど……。」

「こ、ここまでなのか？」

「……悪いな……レナ……約束守れそうにない」

「……お父さん……お母さん……」

「……神よ……」

な、なんかめっちゃ悲観的になってる……うえー……

話しかけづらい。

仕方ない……。

「あ、あのさあ……」

「……」(ビクッ)「……」「」「」

「とりあえず……俺飯食っていい？昼飯がまだなんだけど……」

「……えっ？」「」「」

ぐううゝ……

魔法使いっぽい人のおながが鳴った。

「……やっぱり食糧尽きてたのか……。」

まあ……あの迷路作ったの俺だしなあ……。」

「……一緒に飯……食う？」

「「「……えっ？」「」「」

「……なんか皆唾然としてたけど、ひそかに魔法使いは目を輝かせていた……。」

回想！魔王様！（前書き）

ー話ですー！ーんげん。

回想！魔王様！

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「あむ．．．．．つむっ．．．．．もぐもぐ．．．．．」

どうも魔王です。

現在、昼ごはん食べてます．．．．．。

「あむ．．．．．もぐもぐ．．．．．ゴクッ．．．．．ねえ」

「「「「「（ビクッ）「「「「」

「食べないの？」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「．．．．．まあいいや」

勇者様ご一行つばい人たちとご飯食べてます。

．．．．．あつちは食べてないけど。

おなか減ってないのかなあ．．．．．

ぐう~~~~

「「「「「．．．．．「「「「「」

減ってるよね．．．．．絶対減ってるよね。

．．．．．あああれか。魔王が出した飯なんぞ食べるかあ．．．．．ってか？

ふう……仕方ないなあ……

「えと……そっちに行ったら台所があるから……自分で作ってもいいよ？食材もあるから。もぐもぐ……」

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」

むう……完全な無言の空間。……飯がまずくなりそうだとはいえず、

「「ごちそうさまでした」

ちゃんと両手を合わせてごちそうさまの挨拶。魔王でもちゃんとするんだよ！魔王じゃないけど。

「それじゃ俺は部屋で寝るから好きにしていよ。そこからなら外にも出られるし。」

そういつて部屋の一角を指差す。

……ほんとは何しに来たのかなあ……この人たち。悪事を働くなって言われても……何もしてないし。勇者だとは知りません。

「あ、あの……」

「ん？なに？」

「……あの……魔王……ですよね？」

「……んー……なんかそんな風に呼ばれてるね」

「……呼ばれてる？」

「うん、俺別に何もしてないし？」

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」

「え？」
「……えつと……なにもしてない？」
「うん」
「……魔物を従えて村を襲つたりは？」
「してないよ」
「……人を殺したりは？」
「してないよ」
「……攫つたりは？」
「してないよ」
「……え？」「」「」
「へ？」
「じゃ、じゃあなんで魔王なんて呼ばれてるんですか？」
「それを俺が言つて信じる？」
「……」
「……まあいいや。とりあえず話だけでも聞いてみる？」
「……はい」

と言つわけで話してみた。

「……」（ポカーン）……」「」「」
「……」（ポカーン）……おーい……大丈夫かー？」
「……」
「……はあ……まあいいや。今の話を信じようが信じまいが関係ないよ。俺は何もしていない。これを主張し続ける」
「……え、えつと……じゃあ……全部勘違い……で
すか？」
「そつなんじゃない？」
「……」
「……ええ……」
「俺たちは……勘違いで今まで旅してきたのか……」
「……そんなあ……今までののは全部無駄……だった

の？」

「くっ・・・俺は信じねえぞ！！あることないことほざいてんだろ
うが！」

「だから信じなくてもいいって・・・俺は無実を主張し続けるだ
けさ」

「くっ・・・」

うーん・・・なんか空気が暗くなったなあ・・・

「で？君たちは何なのさ」

「くくくへ？」「くくく」

「だから、なんでこの廃墟に来たの？」

「は、廃墟って・・・」
「ホン・・・えつとですね・・・私たちは・・・」

~~~~説明中~~~~

「ふむ・・・つまり簡単に言うと・・・勇者様ご一行？」

「はい」

「だいぶ簡単に略したな」

「説明頑張ってたのにね」

「理解できてんのか？」

む、失敬な。

「魔王様頭脳なめないでほしいな」

「自分で魔王って言っちゃいましたね」

「認めたな」

「認めましたね」

「意外とアホなんじゃねえの？」

「さつきから傭兵くんのセリフがきついんだが・・・」  
「気にすんな」

どうやらこの人たちはほんとに勇者様ご一行だったらしく、

勇者＝アルベルト・アインハルト

魔法使い＝カナ・クイン

傭兵＝レイ・ミルト

僧侶＝ミナ・アルカナ

と言っらしい。

・・・なんか一人・・・まあいいや。

「そついえばあなたの名前は？」

「俺？」

「はい。魔王じゃないんですよね？なら名前で呼ばないと」

「俺は・・・えつと・・・ん？なんだっけ」

「・・・え？」

「うーん・・・」

「え、え？ちよつと・・・まさか自分の名前忘れちゃったんですか！？」

「やっぱこいつバカだろ」

「仕方ないだろ。もう何年も・・・自分の名前を聞いてないんだから・・・。」

「・・・」

うっ・・・なんか一気に暗くなった・・・。傭兵・・・レ

イクンもなかなか・・・気まずそうな顔を・・・こ、ここは！！

「なんせ・・・数年間も二トだったからな！！！」

自信満々に胸張って言うてみた。

「……はあ……」

なんか非常にバカにされた気分になるため息をつかれた……

「……こいつに気を使う方がバカなんだな」

うわひでえ……気を使ったのはこっちなのに……

「レイ……そんなこと今更気づいたのか」

お前もかブルータス。

「そ、それよりも……今後、どうするか、ですよ」

お、どうやら話題を変えてくれたようだ……やさしいな……さすが僧侶。

「そうだな、こいつが魔王じゃない以上俺たちがすべきことは何か……。」

「てか、魔王がいない以上、魔物は誰が従えてるんだ？」

「ん？魔物を従えてるやつがいるのか？」

「……え？」「」

「だ、だって従えてなかったら……なんで……あれ？」

「従えてなかったら……なに？」

「あ、あれ？」

「おい、どうしたカナ。」

「いや……別に従えてなくても同じじゃないかなと思って……」

「なに？」

「だから、別に魔物が襲ってくる場所って特に統一性もないし、ただ近くにある村や街を襲ってるだけのようにも見えるの・・・」

「「「あ・・・」」」

「確かに・・・」

「そういえば、長たちが統一性がないとか目的がわからんとか嘆いてたわね・・・」

「なるほどな・・・」

ふーん・・・

「じゃあ、俺を倒しても倒さなくても魔物の侵攻は止まらないわけだ。」

「「「「!!!」」」」

「ていうか止める方法あるか？魔物の全滅以外で」

「・・・皆が皆、強くなって対抗できるようにする・・・とか？」

「いつそ誰かが本当に魔物を従えて言うこときかせるか？」

「「「それいい!!!」」」

「・・・つてなぜこつちを見るんだ？」

「お願いします!!!」

「あなたしかいない!!!あれだけ強いあなたなら魔物をすべて従えることができるはずだ!!!」

「・・・頼む・・・」

「俺たちにはもう・・・手段を選んでいる暇がないんだ・・・!!!」

ええ・・・

「めんどい・・・」

「「「「ええ〜!?!」」」」

「そんな・・・！」

「あんた話聞いてたのか？」

「なんで俺がそんなことしなきゃならないんだ？確かに俺は魔王じゃないし魔物の味方じゃない・・・」

「だったら・・・」

「でも人族の味方でもないんだぞ？」

「・・・え・・・！？」「」「」

え？つて・・・こつちがえ？つて感じなんだが・・・

「というか俺をこんな状況に追い込んで？討伐隊なんか何度ここに来た？俺の話しを聞いたやつが何人いた？俺のことを知ろうとせずつに斬り掛つたやつは何人いた？俺のことを無視してこの廃墟にでかい魔法ブチ込んだやつは何人いた？」

「で、でも・・・私たちを助け「勘違いしちゃあいけねえ」・・・」

「確かに俺はお前らをここで助けた。だがそれは俺が作った迷宮にはまっつてたからだ。そして俺は味方ではないと言つたが敵でもないいわば中立だ。」

「・・・」

「その中立のところは何度も何度も攻撃しまくってるのに未だに敵になつてないという事実だけでも俺は褒めてほしいくらいだね」

「なんか思ひだしたら腹が立つてきた・・・」

「俺が最初ここに住んだ時、やつら何したと思つ？」

「・・・？」

「・・・いいぜ、話してやるよ。俺はどうやらこのLVになつてから変なスキルがたくさんついたみたいだな。魔物や動物なんかと会話できるんだ。」

「」「」「！」「」「」

「そして俺が初めてここに来た時、近くにはリスやキツネなんかの



動物たちがたくさん住んでる森があった。お前らここに来る時にあたりにも木、あつたか？」

「……(フルフル)」「」

「だよなあ……俺は会話ができたからよう……一人でさみしかったからよく話してたよ。仲のいいリスかいてな……かわいかったなあ……あいつら」

「……」「」

「で、住み始めて一カ月で可愛い可愛い弟分や妹分みたいに仲良くなった動物もたくさんいたよ……でその頃によ……一番初めの魔王討伐隊がやってきた。やつらの作戦は遠距離からの廃墟ごと魔王を倒すって感じだったんだろうな……その時のやつらの作戦で邪魔になったのが……森だ……」

「……」「……まさか……」「」

「多分その予想……もつと酷いぜ？……やつら森に生命が生きられなくなる呪いのガスぶちまけやがった……!!!!」

「……」「……!!!!」「」

「そ、そんな……」

「焼き払うなら……後からまだ立て直せるんだ……でもよう……その大地ごと……やつらはやりやがった……はは……おかげで弟分たちがもがき苦しみながら死んで行くところを一週間絶え間なく見させてもらったぜ……」

つい……力を入れすぎて座っていた椅子の肘かけを握りつぶしてしまった……。

「ああ……なんとアイツらに助けて……とせがまれたことか……苦しいと……つらいと……」

「……」「……」「」

「だから俺は……あの地ごと消滅させた……。森を……。これ以上苦しめないように……。これ以上広がらないように」



「しかもそれをどうやってお偉いさんに説明するつもりだ？今更俺が魔王じゃないって言って信じるのか？」

「……それは……」

「……難しいな」

「だろ？だからさ……こんなのはどうだ？」

「」「」「」「」「」

「俺が本当に魔王になる」

回想！魔王様！（後書き）

な、なんだか暗い話になってきた。

次回から現在に戻ります。そして明るい話に戻ります！！暗いのはヤダ！！きのこが生えてくる！！

回想終了！魔王様！（前書き）

ちょっと短くなりました・・・すみません



「え？なんでつて・・・そりゃ・・・ねえ？」

「ねえじゃねえよ！！ちゃんと説明しやがれ！！」

「だから、今種族がばらばらに争ってんだろ？ならこの期に全種族に宣戦布告をして・・・」

「あつ！！なるほど！！共通の敵を作るわけですね？」

「そういうこと」

「・・・だが・・・それをやると死人がたくさん出るんじゃない？」

「大丈夫大丈夫。損害が出る前に終わらせるから。ついでに言つと負けるつもりもないから」

「」「」「」

「だから、俺が全部に勝つて、まとめあげる。隷属させて」

「」「」「な、なにいいいいいい！！！？？」「」「」

「ちよ、ちよつと待て・・・頭が痛い」

「・・・一人です種族相手にするの？」

「そつだ。言つたる？俺がやる気になれば一日で世界滅ぼせるつて」

「ああ・・・なんかそれっぽいこと言つてたな・・・」

「・・・本当にやる気か？」

「おう。片っぱしから落とす！！だれ一人殺さずになー！！」

~~~~~回想終了~~~~~

つてことがあつたんだわ。・・・長くてごめんね。ちなみに

これ確か千年くらい前の話しね。

え？なんで俺が生きてるのかって？知らんがな。力と共に寿命も〜みたいな感じじゃね？

で、現在種族は全部俺の支配下にいる訳で・・・。

このこと知ってるのつて種族のトップに近い一部のやつだけなんだ。しかも皆からは俺未だに悪者扱い。

学校とかでは俺、完全な悪人として出てきてる。曰く、一人で五種族の精鋭部隊を壊滅させた。曰く、村や街から誰かを攫ってきては（いろんな意味で）おいしくいただいている。とかね。．．．俺そんなこと一度でもしたかな．．．？ま、まあそんなことは置いといて。

結局、昔俺が頑張って種族をまとめたって話。ただ．．．

「む？．．．魔王様？また来たみたいですよ？」
「またか．．．」

実は、五種族のなかからなんかねえ．．．

勇者、選んでるみたい。

昔いた勇者はもう．．．寿命で逝っちゃったけど．．．いや、居るっちゃ居るんだけど．．．この話はまた別の時に。

今の勇者がさあ．．．なんかね。ほら、事情を知らないからさ？

種族の開放！っていつて戦いを挑んでくるわけよ．．．

俺、政治にはほとんど干渉してないから昔のままなんだけどなあ．．

．．．それどころか俺自身が魔法でちよつとがんばってるから農作物とか昔よりいいんだけど．．．。

それを知らない、けどそこそこに地位の高いやつが．．．ね。

現在俺が支配下に入れている五種族は、それぞれが国を持っている。

人族の国の首都、ヒューズ、そしてその他国数力国。

亜族の国の首都、アレズ、同じく他国数力国。

魔族の国の首都、マドーラ、同じく数力国。

龍族の国の首都、ドラグレア、同じく。

神族の国の首都、ゴードス、同じく。

ってな感じで、一番のトップはそれぞれの首都。そして事情を知っているのは首都のトップのみ。

だからその他の国のなかのいろんな街や村から勇者が選ばれては魔王（俺）を倒しに来る。

て言うか選んでるのは首都以外の国の王様ですけどね!!!

もちろん負けないよ？負ける訳ないじゃん。初代の勇者からだんだんと弱くなってるし。

今なんか優秀な冒険者の方が強いよ？それでもSランクに勝てるかわからんぐらいだがね。

で、今俺のところに来たのが・・・

「魔王！お前を倒して皆を開放する!!!」

勇者なわけですよ・・・

ていうか俺のやってることを知ってる人たちは逆に俺が倒されたら困るって思ってるはずだけどね。

「見つけたぞ・・・!!!覚悟しろ!!!」

「いや・・・今ご飯食べてるんだけど・・・」

「知るか!!!喰らえ!!!陣龍剣・・・!!!」

ダッ・・・!!

勇者が突っ込んできた。・・・うわぁおせえ・・・初代の方がまだまだ早かったぜ？

ばし・・・

あまりにも遅かったので指で挟んで止めて見た。

「んな!?!」

ヒュツ……

軽く腕を振って勇者(笑)を投げる。ていうかなんで一人で来てんの?コイツなめてんの?とりあえず……ご飯食べよ。

「もぐもぐ……もぐもぐ……」

「くそっ!!!魔王!!!俺を無視して飯か!!!」

「もぐもぐ……ゴクツ……いや……飯食ってる最中に来たのはそっちだろ?」

「うるさい!!喰らえ!!奥義・魔龍神人剣!!!!!!」

お、アレ、俺が作った剣術じゃん。……いつの間に名前があんなのになったんだっけ?

名前が変わってもわかるのかって?そりゃあ……動きがまったく一緒だし?

ドガアアアアン

あ、あたった。

「どうだっつ!!!」

「なにが?」

「な、なに!?!」

そつえばさあ……よくこついう時にどうだ!って言うけどさあ……あれなんて返せばいいの?なかなかやるなあ!とかいえばいい

侵略です！魔王様！（前書き）

すみません。今回はちょっと………とつかかなり短いです。

侵略です！魔王様！

この世界にはちよつとした神様の加護がある。

ここでは、誰であろうと殺されないのだ。

魔物なんかに殺されても最後に立ち寄った教会や、自分の住処に一番近い教会なんかで蘇生したりする。

だが、死なないわけじゃない。ただ殺されないのだ。

自殺はできるし、病気や寿命なんかじゃ当然死ぬ。……まあ自然災害とかじゃ死なないからちよつとわかりづらいが……。

まあ簡単に言うと死ぬことに条件がいるという方がわかりやすいと思う。

あ、事故死でも復活するよ？崖から落ちたりとか。……飛び降り自殺が微妙なんだよねえ……。

はつきりと『死にたい』と思いつつ飛び降りれば多分死ぬ。微妙だとそうでもない。

まあそんなことは置いといて、何が言いたいかと言うと……

「死んでも死なないから勇者は突っ込んでくる」

ってこと。さっきのやつもそう。死なないとわかってるから簡単に突撃してくる。……そのせいでクソ弱いだわ……

俺が直々に鍛えてやろうか。……いつか死んだ方がマシだって言つて自殺しそうだからしないけど。

ちなみにこの神様の加護らしきものは魔物が現れてから一緒に発生した。

なんか魔物に襲われて死んだはずの行商人が突然近くの町の教会に現れたのが最初なんだってさ。

……なんか身につけてるものとか荷物とかはいつの間にかそばに置いてあるらしい。……なぜ？

まあ身につけてるものが付いて来ないんだつたら教会で蘇生するたびに生まれたままの姿で出てくるってことだよなあ……
美少女とか美女とかならいいけどおっさんとかババアが出てもなあ……まあついてくるから関係ないけど。

あ、そういえばさっきの勇者、そろそろ教会で蘇ったはず。……
・といつても特に用事はないが。

「魔王様あゝ。そろそろ会議の時間でえゝす」

「ん？もうそんな時間？……めんどいからサボっていい？」

「ダメです」

「だよねえゝ」

実はこれから会議があるのだ。五種族のトップが集まる会議が……
・俺魔王だからさあ……実質俺が全種族のトップなんだわ……
。つまり俺が出ないと本当の決定ができない……みたいな……
・政治には俺口出しするつもりないのに何をしろと。

「早く早く！もう皆さん集まっています」

「はいはい……」

あ、コイツの紹介忘れてた。っていうか一番最初に出てたやつのこととも忘れてた。まず最初にいたやつから紹介しとこう。

初めに出てきたのが、俺の身の護衛をやってる一元勇者ご一行の傭兵と魔法使い《……》のレイとカナだ。

え？なんで生きてるのかつて？いや死んでるよ？今は幽霊として俺の仲間やっています。

ちなみにあの勇者様ご一行はみんな幽霊になったよ？一応皆知らない。だって見えないし。正確には見えないように過ごしてるだけな

んだけど。

実際俺が見えてるから言える。

そこで次。

今いたのがミルファ。ちなみにあの子魔物ね。魔物にもLVがあつてさ。冒険者倒したり他の魔物倒したりするとLVが上がるんだけど……。

実はアイツらLVが一定以上上がると意思を持ったりするんだよねえ。倒されると元のLVに戻るけど。

ちなみにミルファはスライムだ。……ちゃんと人型だけ？女の子の。

魔物は今言ったようにLVが一定以上上がると知能を持つ。そしてさらにLVが上がると……なんと人型になるんだ。

正確にはなることができる、かな？人型に変身できるようになる。

そしてそのLVはスライムだと大体1000を超える。……すごくね？スライムって最初LV1で出てくるんだぜ？

それが相手を倒しに倒しまくった結果がこれだ。で、俺は相手のLVがわかるからびっくりして、仲間にしたわけだ。いや……ほんとにびっくりしたぜ。

森を散歩してたらいきなり超高レベルのスライム登場（人型で出てきました）が魔王様は種族を見抜けます（しゃがんだからな）……とっさに捕まえちまったZE……はい誘拐ですねごめんなさい。

だつてさあ……めっちゃかわいかったんだもん。

……もんとか俺が言うときもいな。やめよう。

まあそんなことは置いて、結局さらった後、いろいろあった結果が……

「着きましたよ。ではいつてらっしゃいませ！」

「はいはい」

俺の一番信頼のおける部下ってわけだ。

「ども、魔王です」

「おお！来た来た。では全員揃ったところで会議を始めますか」
「そうですな」

そして今ここに居るのは俺含め六人。

俺以外はそれぞれ種族のトップの人たちだ。

まあ・・・紹介はまたいつか・・・。

「オホン・・・それでは今から種族会議を始めます」

「・・・・はい」

「えー・・・まず最初の議題は」

バタンツ！！！！

「た、大変です！！」

「何事だ！今は種族会議の途中」

「魔王が攻めてきました！！！！！！」

「・・・・・・は????」

撃退です？魔王様！（前書き）

またまた更新ですが・・・やっぱり短いです。

いやいや！！待て待てそこの冒険者！二億バカにてめえら程度の攻撃が利くか！

まだLV50も超えてねえじゃねえか！

ボスン……

うわシヨツボイ音……

「な、なんだと！？この俺の攻撃が効かない！？」

いやいや……こいつ聞いてなかったのか？アイツはLV二億だったの……。

しかも初級魔術かよ……。いいえ中級魔術です。

「ふん……カスが。消えろ」

ドゴオオオオン……

おおう……なかなかの攻撃だな。跡形も残さずけし飛んだぜ……
・冒険者（笑）

「うおおおおおおおおおお！！！！」

あ、またなんか突っ込んでった。

どじおおおおん……

「ぎゃあああああああ！！！！」

返り打ちにあってんじゃん……。なんでまっすぐに突っ込むかし

V23の剣士（失笑）

「ちっ……この程度のカスしかおらんのか!？」

うん。その辺にはね。だってLVの高い奴は実力の差がわかるから逃げたもの。

あ、でもまだ……

「俺が相手だ魔王!!!」

似非勇者がいた。

「喰らえ!ライトニングスラッシュ!」

ズバツ!!

「ふん……その程度当たらんわ。消える屑。」

ドゴオオオン……

あ、やられた。

……やっぱ似非だな。

て言うかそろそろ出ないとこれ以上庭壊されたくねえな……仕方ない。

「おいアンタが魔王?」

「ん?そつだ!俺様が最強の魔王だ!!貴様がこつちの魔王か?」

「うん」

「そつか。なら死ね」

ズドオオオオオオオオオオ！

「ま、魔王様あああああ！！」

「ふはははははははははは！！魔王もこの程度か！！」

「え？何が？」

「は！？」

「もう！早く倒してください！！庭の修理は全部私がやらなきゃいけないですよ！？」

「いや・・・ミルファさんや？少しぐらい俺の心配は・・・」
「するだけ無駄です」

言いきられた・・・。

「な、なんだと！？貴様・・・！何をした！」

「いや普通に喰らったただけけど・・・」

「・・・さすが魔王と言ったところか」

「いや、俺まだ何もしてないんだけど・・・」

「だがこれならどうだ！！魔王刃！！！」

ブンッ！！

ガキッ！！

「な、なに！？斬れない・・・だと！？」

「・・・えっ？逆に聞くけど・・・これで何が斬れるの？」

「なっ！！！」

いやだつて・・・これめっちゃ分厚いし・・・

「せめて剣を使おうよ……」

「こゝこれは立派な剣だ！！！」

「いやいや剣っていうのは……」

ヒュンッ

「こつこつを言うんだぜ？」

ズザアア……ドサツ

「ば、バカな……俺の剣が……真つ二つ……!?」

「まだいいはるか」

「き、貴様……!!許さんぞ!!俺の本気を見せてやる……!!はあああああ!!」

「いや、今まで本気やなかったんかい」

「当たり前だああああああああああ!!」

魔王^{バカ}は叫びながらぐんぐん力を上げていく。

現在LV400000000。

……いやだから。桁が違うから無駄だって・

「なあ……」

「なんだ!?今忙しいのだ!!」

「アンタって相手のLVとかわかんねえの？」

「そんなものわかるわけがないだろう!!」

へえ……わかんねえもんなんだ……ってそれより。

「なあ、今アンタ思いつきり無防備なんだが……攻撃してもいいの?」

「なあ！俺もいいか？」

「私も久々に食べたいです！」

「……（キラッ）！！！」

……なぜか魔法使いさんだけ目が怖かったです。

そして未だにポカンとしている冒険者さんたちのところへGO！

「おい。魔王はとりあえずぶっ飛ばしたし、飛ばした先に転移魔法使ったから多分元の世界に帰ったけど……また来たらここにこれ立てとくから鳴らして。すぐ行くから。て言うか緊急事態になったら鳴らしてくれたらすぐ行くから」

「……ポカーン……」「」「」「」

「……んじゃ俺は行くからな」

そういつて街のなかのあいてた場所にひとつ、特殊な魔法をかけた鐘を作って帰った。

……が二日後にはいたずら好きの子供がジャンジャン鳴らしていたらしい……。

そんなこんなで魔王様は敵さんを撃退した。弱すぎてストレス発散にもならんかったなあ……。

撃退です？魔王様！（後書き）

・・・次あたりにめっちゃ強いのだしいなあ・・・

お仕事です？魔王様！（前書き）

今回も短く？なりました。ていうか行を詰めすぎました。

お仕事です？魔王様！

いやあゝ弱かったね。馬鹿^{バカ}。

軽く殴った程度で星になるとか。こいつが殴ると星が割れます。というかでこピンで割れます。

あ、どうもみなさん、魔王です。最近名前がないことを気にし始めました。

。というかあるはずんだけど昔すぎて忘れちゃったんだよねえ・・・てか暇。仕事は俺しないからなあゝ。ニートなんだよなあゝ。

「魔王様あゝ仕事です」

「だが断る！！」

「なんで！？今暇だっと思ってたじゃないですかゝ」

「お前はなんで人の心を当たり前のように読んでいるんだミルファ」

「魔王様なら読めます」

「できれば読まんでくれ」

「だが断る」

「ブルータスお前もか・・・」

「誰がブルータスですか」

ほんと、なんでLVが上がったからって心が読めるんだ？読心術っていうスキルでもあるのか？新種のサトリですかアゝ？

「だから魔王様の心しか読めませんって」

なぜ俺。

「ちなみにアルさんとかレイさんとかの勇者様ご一行は皆魔王様の心が読めるそうですよ?」
「そうか」

俺がサトラレだったのか。

ていうかアイツらいつの間読めるようになったし。

「幽霊になってからだそうです」

「うそん」

「きもいです魔王様」

そんな頃から読めたんかい。ていうかミルファ。きもいとか主マスターに言うな。

「え?主マスター?主(笑)じゃなかったんですか?」

「おまいはいつからそんなに黒くなった」

最初のころはまだ純粹だったのになあ・・・

「魔王様にあつてからです」

「俺のせいか」

なんてこつたい・・・

「俺は一体どこで教育を間違えたんだ・・・」

「最初からです」

「・・・・・・・・」

スライム従者に弄られる魔王様マスターとはこれいかに。

まあだからといって捨てたりするわけでもないけど。

俺は元の時空へと戻りつつ、その空間を消滅させる。

「ただいまあゝ」

「おかえりなさい。どこ行ってたんですか？」

「ちよつと野暮用にな」

「そうですか」

「……………こいつ確信犯だ。ニヤニヤしながら聞いてくるもの。」

「……………（直接言ってくればすぐにでも……………）／／／／／」

／

「ん？なんか言ったか？」

「いいえ！／／／」

「……………なんか顔赤いぞ？風邪でも引いたか？いや……………スライム
つて風邪ひくのか？」

「なんでもないです！！」

なんだ？ミルファがなんか怒ったように行ってしまて 氏ねリア充
おまつ！？注意項目にまで死ねとか言われるとは思わなかったわ！
！ 死ねじゃない氏ねだ。ほんとに死んだらミルファちゃんがかわ
いそうだろうが。

……………あれ？俺誰と会話してんの？ 頭のなかで誰に訪ねて
るんでしょうねコイツ。

……………。

さて、仕事でもするか。 明らかに話を逸らしていますが最後まで
温かい目、生温かい目、恨みのこもった目で見てあげてください。

……………

くミルファ side

魔王様はいつになったら私のことを一人の女として見てくれるかなあ〜？

確かにあの人にずっと育ててもらって来たからあの人の子供みたいな立ち位置にいるけど……。

ずっと一緒にいたからこそ魔王様の××××での弱いところはたあくさん知ってるのになあ……クスクス。

ああ……魔王様あ〜……ミルファは魔王様が大好きです。

早く魔王様と『自主規制』とか『見せられないよ!』とか『ズキユ

ーン』とか『バキューン』とか『閲覧済み』とかしたいなあ……

あ、『KEEP OUT』とかもいいな。でもその場合って私が『

うふふ』とかしないといけないのかな? / / /

でもそれよりも『Oh! Dangerous / / /』とかのほうが

いいかな? でもそれだと私が動かなきゃ

くミルファ side out

すいませんそろそろ不味いので

………なんだろう。ミルファがすごく……すごく手遅れな気が

する……。

ま、まあそんなことは置いといて。いや、そんなことって言えるし

Vじゃないけどまあ置いといて。

仕事したくないなあ…… お前ほんと今働いてる人に謝れ。

ごめんなさい。

自覚してるんで。自分ニートだつて。なら働けよ。

「あの魔王様、お願いが」「だが断る!!!」「ええっ!?!?……

しよぼん……まだ何も言っていないのに……」

「え? 誰? 俺に何か用?」

「え、今断るつて……」

「ああ、ごめんそれ独り言」

「そ、そうですね(魔王様って変な人?)」

「それで? 俺によつて何?」

「あ、あのですね、実は魔王様の仕事か」「さて、俺は部屋で寝るかなあ〜」ええっ!?!? な、なぜですか!?!?」

「え? だって仕事つてめんどくさいじゃん」

「あ、当たり前です!」

「あ、ところできみ誰?」

「あ、私ですか? 私はコレット・エイルと言います。最近新しくここに来ました」

「そうなんだ。どおりで見かけない顔。よろしくね〜」

「はい! よろしくお願ひします!」

「うん、じゃあ俺は部屋に戻るから。がんばってね」

「はい! つてちよつと待ってください!?!?!」「ちっ……」

「ちっじゃないです!?! 危うく流されるところでした!」

「ふう……なかなかやるなお主。名は何と言う」

「え? 私ですか? 私は つてさっき言ったじゃないですか!?!」

「そうか、コレットと言うのか」「やっぱり覚えてるじゃないですか!?!」「……お主は筋がいい。これから精進せえよ?」

「え? あ、はい。がんばります!」

「うんうん……ではな」

「はい!……つて違いますんで帰ろうとするんですか! そんな口調まで変えて!」

「さてここで問題! デデン! $2 + 3 \times 4 \times 5 \div 2 - 1 \dots \times 0$ は?」

「ふええ!?!? え、えつとえつと……」

「5」

「え、ちよ、ちよつとまつてくd」「3」「ふえええ!?!? え、ええ〜とお……?」「2」「むむう……あ! $\times 0$ があるから……」「1」

わ、わかりました!?!?!」

「答えをどうぞ」

「ぜ、0です!?!」「」「ぶつぶー答えは32です」「な、なぜですかあ〜!?!?」

「では説明しよう！よおしく聞くんのだ！」「は、はい」

「まず最初に掛け算から計算しなくてはならない。これは知ってるな？」

「はい」

「ではなぜ・・・答えを0だと思ったのかな？」

「えつと・・・-1の次に $\times 0$ が・・・あ！足し算と引き算がある！」

「そう、掛け算と割り算しかない時だけなら0が一つあれば答えは0だが、他があるならまだ終わらん」

「つてことは先に掛け算と割り算をして・・・答えは1？」

「いやいや・・・掛け算と割り算だけまとめてどうする。こおくやつて括るんだ！！男女d・・・と違った。 $2 + (3 \times 4 \times 5) \div 2) - (1 \times 0)$ 」

「あ、そつか、0が掛けられているのは1なんだ」

「そつだ！そして計算すると・・・ $2 + (60 \div 2) - 0 \dots$
- 0は関係ないから消して、かつこのなかを計算」

「 $2 + (60 \div 2)$ だから・・・ $2 + 30$ ？」

「そつだ、そして残りを足して・・・」

「32！」

「正解だ！よくやった！」

「はい！ありがとうございます！」

「よしよし・・・では、今日の授業はこれでお終い。さて、今日はもう帰るな」

「はい！それではまた今度！さようなら！」

「はい、さようなら」

「・・・つて！？！ただけ長々と！？このまま行かせるとでも！？」

「ちつ・・・ここまでやつても気づくのか・・・小賢しい」

「小賢しい！？私ですか！？魔王様の方がやり口的には小賢しいのでは！？」

「ほう……わざわざお前のために授業してやったのに小賢しいと?」

「その授業で仕事から逃れようとしてるからです」

「ちつ……責任転嫁も失敗か……」

「ていうかいつまでこのコント続ける気ですか!? どんだけ私しゃべり続ければいいんですか!?」

「死ぬまで」

「即答ですか!? っていうかなんで死ぬまでしゃべり続けなきゃいけないんですか!?」

「お前ツッコミじゃん?」

「なんで私がツッコミなんですか!? っていうか誰も漫才の話なんかしてないですよ!?!」

「お前……自覚してなかったのか?」

「なにがですか?」

「これ明らかにコント」

「知ってますよおおおおおおおおおおお!?! だからなんでこれをコントにしちゃうんですか!?!」

「お前がツッコムから」

「あなたがボケるからです」

「……俺が原因か!?!」

「今さらですか!?!」

「なんてことだ……もう寝る時間じゃないか」

「そこですか!? しかも早いですよ!?! まだ昼の二時じゃないですか!?! ……って仕事がああああああ!?!」

「ふっふっふ……今頃気づいたか……だがもう遅い!?! すでに下準備は済んでいる……後は待つだけだ!?! これでアルベルトも終わりだ!?! はっはっはっは」

「な、なんですってえ!?! いったい何が……ってほんとに何したんですか!?!」

「アルベルトの弁当をミナに作らせた」

「アルベルトさあああああああん!? え!? ミナさん料理できるようになったんですか!？」

「ん? お前新人なのにミナの手料理のこと知ってんのか?」

「歓迎会の時レイさんが食べてました」

アイツ……それでこの前しばらく寝込んでたのか。

「後で……アイツの好きな物でも作ってやるか……
はは……あいつ喜ぶかなあ……?」

「死亡フラグ立てないでください!」

「そしてアイツは……帰ってこなかった」

「勝手に殺さないでください!」

「そしてアイツの足元には『コレットが……』の文字が……」

「私が犯人!？」

「そして食べられた弁当の横にある……二つの使用済みの箸……」

「……え……?」

「……彼が箸を落とすだけだった……」

「なんでわざわざそこまで言ったんですか!? 言う必要ないじゃないですか!？ 他にも被害者がいるのかと思っただじゃないですか!？」

「あっはっは。しかも今回はアイツに俺の手作りって言うてあるし、見た目もそれ相応だった。そして俺の魔法で弁当の効果が出るのを遅らせたからだいぶ食ってからじゃないと気付かない。あっはっはっは」

「ってそれほんとに待つだけでやばいじゃないですか!？」

「おうかなりヤヴァイ。はっはっはっは」

「ていうか今回のアルベルトさんの依頼って魔王様が頼んだんじやなかったんですか?」

「は……あ、やヴァい……かなりヤヴァい……」

「え!? 何頼んだんですか!？」

「ただんだろっ……」

魔王様はちゃんと毎日、お風呂に入ってます。

お仕事です？魔王様！（後書き）

詰めすぎて読みにくいかあったら言ってください。
・・・強いキャラ出せんかった・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1251z/>

最強です！魔王様！！

2011年12月11日11時50分発行